

## 平和と健康

早稲田大学教授（社会科学総合学術院長） 多賀秀敏

### はじめに

本日は、私の研究してきたことと、学術大会がテーマとしているwell-beingとの架け橋、すなわちcross-disciplinaryなお話をしようと考えています。大学では、平和学という科目を講じております。平和学は、ある日からwell-beingの一部を対象にするようになりました。そこにいたる過程をお話しさせていただきます。

### 初期の平和学

平和学は、もともと、戦争を予防し、始まってしまったら、その拡大を防ぎ、終結を早める、それを研究する学問として出発しました。第一次大戦の惨禍、加えて、第二次大戦の惨禍の猛省から始まりました。国際連盟、国際連合とほとんど出自が同じです。その内容は臨床研究としての外交史・国際政治学・国際関係論、基礎研究としての計量研究など、規範論としての制度論、すなわち、国際機構論・国際公法といったdisciplineの総合からスタートしました。

シバード (Ruth Sivard) という人が、20世紀を振り返って、1996年に書いた言葉があります。「いまだに4年間残されているというのに、この近代的な世紀は、既に、250もの戦争と109,746,000人の戦争に関連した死に責任を負ってしまった。この数値は、現在のフランス、ベルギー、オランダとスカンディナヴィア4カ国、すなわち、デンマーク、フィンランド、ノルウェー、スウェーデンの総人口の合計よりも多い。この世紀の後半だけでも、戦争はより頻度を増し、より死者を増している。一つ一つ

の戦争の平均死者数は、19世紀のその6倍に等しい」(Ruth Sivard, *World Military and Social Expenditures, 1996, World Priorities, Washington, 1996, p. 7, 11-15, 筆者訳*)。

これまで人類はこんな経験をしたことがあるだろうか。このようなことを二度と惹き起こさないためにもと英知を結集して国際連盟、国際連合もでき、平和学という学問も誕生しました。初期の平和学は、軍拡競争、勢力均衡論批判、核抑止論批判、紛争の一般理論などで、成果をあげました。軍拡・戦争から利益を得る集団の存在も分かってきました。当初は、アイゼンハワーが軍産複合体と名付けましたが、現在では、軍産官学労情民複合体と呼んでよいと考えます。

### パラダイム・チェンジ

戦争を防ぐための戦争研究に平和学が没頭していた学界に、1968年に激震が走ります。国連の設置とともに第3世界の国々が独立して発言権を得てきたことと無関係ではありません。

ピースレスネス (peacelessness) という言葉が登場したのです。インドのダスグプタ (Sugata Dasgupta) という研究者が1968年に、第2回国際平和研究学会大会で、報告しました。その内容は以下のように集約されます。

「それまでの平和研究は、戦争を防ぐための戦争研究に集中していた。とりわけ、冷戦中は、核戦争の回避は、人類にとって、最も重要な課題とされた。欧米など先進国では、日常生活に必要な生産の増大や、医学、教育などの進歩があって、確かに戦争がなければ、『平和』と言

いえた。したがって、平和研究の主題も資金も資材も人材も、戦争回避研究に注がれた。他の多くのアジア諸国と同様に、インドは、独立するまでは、実際、戦争を知らずにきた。それにもかかわらず、東洋の諸国の人民は、平和に暮らしてきたのではないという事実は厳然としている。それどころか、経済的・心理的両面における貧困と、経済的・制度的枠組において伝統的なステレオ・タイプが支配してきた。このことは、世界のなかで、この地域における生活を、常に、非平和的 (peaceless, 始末におえないほど不潔で、野蛮で、不十分) にしてきた。東洋では、戦争はまれであったにもかかわらず、同時にその広範な大衆には、全く平和も存在しなかった。彼らが苛まれてきた生活の実態に最も近い定義は新しい術語によってのみ記述が可能である。すなわち、私は、平和ならざる状態、ピースレスネスという概念を選択する」。

(Sugata Dasgupta. "Peacelessness and Maldevelopment: A new theme for peace research in developing nations," in *International Peace Research Association, Proceedings of International Peace Research Association Second International Conference*, ASSE, Van Gorcum, 1968, Vol II, pp. 20-21. 筆者訳) それまでの平和学は、平和 (peace) vs 戦争 (war) でしたが、戦争にバー (ー) をかけたもの、すなわち「非戦争」は平和とイコールではない。戦争がないからといって、それは即平和ではないと主張したのです。ピースレスネスという状態がある。平和ならざる状態だ、ということ、ダスグプタは述べたのです。

当時のインドの状況はどうだったでしょう。私も70年代のインドを知っています。地面の中から人間がわき出てきたのだろうかと思うほど、どこに行っても人間がいて。たとえば川岸に行くと、上流で一生懸命洗濯をしていて、その少し下流で野菜を洗ったり、水をくんでいたりする。少し下のほうに行くと、何だか分から

ない、木を井桁にしてたき火をやっているのです。「たき火をしているな、こんな暑いところで」と、そばに寄ってみると死者の足がニュッと出ている。茶毘にふしている。私は一瞬ぎょっと驚くけれども、彼らの慣習です。灰を川に流します。結局のところ、その灰をすくい取って料理に使う、洗濯に使う、用足しに使うということが行われている。街に出ると年老いたいわゆる象皮病かと思われる人が一日中道ばたに座っている。空きカンをおいてずっと座っている。日常的に、路上生活者があふれ、収入がなく多くの人が飢餓と同居している。伝染病などに罹患しても薬が買えない。確かにダスグプタが言うとおりの、戦争をしているわけではない。しかし、これは平和ではない。では、何と呼ぼうか。やはりピースレスネスと呼ぶしかない。平和ならざる状態で、戦争ではない。そのように呼ぶしかないとはっきりと認識して帰ってきました。

インドの貧困率を調べてみました (図1)。貧困率はいろいろ定義がありますが、これは絶対的貧困線を下回る人びとの割合です。かなり減ってきて21世紀になると30%を切った。一番激しいときは絶対的貧困線は70%近くに達しています。ダスグプタが論文を発表した頃は絶対的貧困者が60%です。その頃インドの人口が7億だとして6割というと、4億2千万人は絶対的貧困より下で、人間としての暮らしをしていなかった。そこから生まれてきた概念です。

インドは世界最大の民主主義国を誇っています。かれはその実態を世界に報告して、非難しました。peacelessnessという概念に世界中が動きました。これはインドにとっては恥です。社会学者は、ときに、命がけで仕事をします。自国の恥を世界に曝してでも理解を請うときには、国内社会から弾圧を受ける覚悟でやらざるをえない。そして、新しい現象、今まで名辞のない現象に対しては、新しい名称を与える。そういう社会学者の役割もあるわけで



Datt & Ravallion, "Is India's Economic Growth Leaving the Poor Behind?", May, 2002, p. 29, and Indian Planning Experience, p. 60から筆者作成.

図1 インドの貧困率の変遷

す。

人間開発指数で計算しても、インドは低い。州別の5歳以下の乳幼児で低体重の子どもの割合は、どんなに良い州でも20%です。

世界はどうか。未だに世界で解決すべきは、飢餓問題です。20世紀になって人類は、全体として飢餓を脱しました。人類が産出する食糧の総量は、人類の総数で割って足りるまでに増加しました。その足りたものを分け合って食べているはずなのですが、栄養不良者は、2009年で10億人です。世界総人口の、7人に1人は飢餓人口なのです(表1)。これだけの人が飢えています。餓死とは、食べるものがなくて死ぬことです。よほどつらいことだと思います。

世界の飢餓人口の推移をみると飢餓人口の絶対数は増えています。健康を考えれば、まず人が生きていけるかどうか最大の問題です。交通事故とか、癌とか、いろいろあると思います。いまだに飢えは世界第1位の死亡原因です。1分間私がここで話をしていると10人が、どこかで食べものがなくて死んでいる。過度の栄養不足が続くと、身体的・知的発達の遅れにつながる。そうすると、その国の経済や社会の

表1 世界の栄養不良者の数値、人数と割合

年	人	%
1969—1971	878million	24%
1979—1981	853million	19%
1990—1992	845million	16%
1995—1997	825million	14%
2000—2002	857million	14%
2004—2006	873million	13%
2007—2008	1000million	
2009	1020million	

WFP国連世界食糧計画 <http://www.wfp.or.jp/kyokai/hunger.html>

未来に大きな損失をもたらす。ただ人が死んでいくだけではないのです(WFP国連世界食糧計画, <http://www.wfp.or.jp/kyokai/hunger.html>参照)。

わが国は、世界最大の農産物の輸入国といわれています。捨てる量も最大です。さしもの農水省も黙視できずに数年前から白書で警告しています。大体披露宴では22.5%が捨てられます。日本は変な国です。世界最大の食糧の輸入国です。一番多く世界から食料を輸入して、一

番多く捨てている国です。捨てるために輸入したのかと疑いたくなります。死んでいるのはおむね輸出している方なのです。食糧を輸入して、それを残して腐らせて捨てて、人を殺しているのかと。日本はそう見られても、結果だけ見れば、反論できない。世界で、餓死しそうな人びとへ一年間援助された食料は594万トンです。日本は毎年500~900万トン捨てています。

世界銀行がPPA (Participatory Poverty Assessment) 調査をしました。のべ73カ国6万人の調査員が、81カ国の調査に参加しました。

「貧困とは何か」という聞き取り調査です。3部作で発表しています (*Can Anyone Hear Us? Crying Out for Change, From Many Lands*)。その中のいくつかをお示しします。

「今朝亡くなった少年を例にとろう。少年は麻疹でなくなった。ところが村中みな、医者に診せれば治ることは知っていた。でも、両親にはお金がなかった。だから少年は、緩慢で痛みで満ちた死を迎えた。少年は、麻疹で亡くなったのではない。貧困で死んだ」。貧困とはそういうものだとガーナのある村の長老が話をしています。

次はミンダナオですが「農業局がトウモロコシの種を無料で配布する。すると、種をまく代わりに、食べ物がないから、仕方ない、トウモロコシの種を料理して、食べさせてしまう。実際に植えるときには種を買わなければいけない。お金を借りる。そのローンが返せない。どんどん悪循環になってしまう」。まだ世界の食料事情はこんなものです。このような例はたくさん出てきます。「パン1枚しかない。幾度となく、彼女はどちらが食べるかを決めなくてはならなかった。彼女か、それとも息子か」「朝はイモ、昼は何も食べない。夜はイモ。これで寝る」。こうしたことが世界各地で起きているのが実態です。読んでいくと目を覆いたくなるものもあります。援助についても、教科書が買えずにコピーを与えられて屈辱感に苛まれた

り、援助でもらった服は、すぐ分かってしまうのでいじめにあって、登校拒否になったりなど、報告されています。

最初は、世銀は大金をかけて愚かな調査をしたと思いました。6万人もの人が81カ国に赴いて、貧困者らしき人、おぼしき所で「あなたにとって貧困とは何ですか」と愚問を発する調査でした。これだけケースが集まってきて、まとまってみると、何か意味があると考え直しました。調査員がその場で殴られて帰された例も出ています。「何てことを聞くんだ。見たら分かるだろう。うちは屋根がないだろう。これが貧困だ」と言って殴られたとか報告されています。

精神的貧困とか、豊かさの中の貧困も喫緊の解決すべき課題ですが、まずは、人間としての生命を維持することができていない。貧困にはいろいろな特殊性、個別性があります。共通項目もあります。貧困者ゆえに差別されたり屈辱を受けたりする心理的圧迫も含めて貧困なのです。ジェンダーによる差別、障害などから社会的に欠陥部品視されて無力感に陥るなど、これらはすべて貧困に含めるべきです。机の上や国際会議で、相対的貧困だ、貧困線だ、ジニ係数だ、ローレンツ曲線はどうだとか、一生懸命やっています。ところが、実態はこうだということが分かればこれでもう十分だと思います。

清潔な水を利用できない人12億人、基本的な衛生施設を利用できない人30億人。電気やガスを利用できない人20億人、内戦や動乱に巻き込まれている人5億人、1日1ドル未満の生活者は12億人、1日2ドル未満の生活者は28億人です。これは、為替レートをそのまま使うのではなく、実際の物価によって調整するPPP (購買力平価) で測っています。1ドルが今日本では約80円です。日本で80円未満で暮らせない人は、途上国へ行っても1ドル未満で暮らせません。そのような計算方法で、そういう人が12億人。160円以下でも約28億人、人類の約半数近くはこのような暮らしをしている。

well-beingが福利とか訳された時代がありました。その対極にあるのがこのようなPPPで計算されたpovertyになると私は考えました。つまり、それには屈辱などの心理的な側面が含まれます。文化的な帰属意識や連帯などの社会的規範が崩れてきます。文化的な帰属意識や連帯がなければwell-beingもありません。基本的な社会的インフラに対するアクセスがありません。識字能力は人間開発指数の中に含まれていますが、このようなものがない。そして健康状態。多くの場合、栄養不足による免疫力の低下などが原因で命が失われています。これこそが貧困だとすれば、その対極にまずはwell-beingの基礎があるのではないだろうかと思えます。

これは連鎖です。確実にif so, then soまでは行かないのですが、ぐるっと回って戻ってくるようなスパイラルが形成されています。飢餓の要因はいろいろありますが、循環でありながら違う局面に入っていくスパイラルで形成される連鎖現象が、世界を覆っているのです。結局「彼らが苛まれてきた生活の実態に最も近い定義は新しい術語によってのみ記述が可能である。すなわち、私は、平和ならざる状態、ピースレスネスという概念を選択する」。ここから平和学が戦争研究のみの学科から脱して、広く、貧困、格差、開発、人権、環境などの分野を研究対象に取り込むことになりました。これを上手に概念整理したのが、ヨハン・ガルトゥング (Johan Galtung) というノルウェーの社会学者です。

## 構造的暴力

彼は、平和の反対は暴力、violenceであると定義し直しました。暴力には、2種類あります。S + V + O、つまり暴力をふるう人と、その暴力が何であるか、その対象が何であるかが分かっている主体的暴力と (表2)、主体が分からない構造的暴力 (structural violence) とがあります。後者は、社会構造に主体がビルトインされています。やられていることは分かります。対象も分かります。誰がしているのかが分からない。ダスグプタが言ったピースレスネスは構造的暴力の結果です。構造的暴力が行われた現象なのです。たとえば誰が暴力をふるって、象皮病の人が1日座り続けてカンの中に他人がめぐんでくれるお金を待っていないか、誰が彼をそうさせているのかは分かりません。おそらく社会構造に原因があるのだということで、構造的暴力と名付けました。彼の暴力の定義は「人間あるいは人間集団の、身体的あるいは精神的な自己実現の現状が、その人たちの潜在的な実現可能性以下に抑えられるような影響を受けているならば、そこには暴力が存在する」。要するに、潜在的实现可能性と現実、達成しえたはずの状態と現実の状態、暴力とは、両者の格差に働く力です。もっと簡単にいえば、図2のグレーの部分 (左端の棒グラフ) が肉体的精神的実現可能性、濃いグレーの部分 (真ん中と右端の棒グラフ)、すなわち、黒い部分の欠落したところに働いて

表2 欠落した暴力のS+V+O

主 体	行 為	客 体
主体がわからないが明らかに被害者が存在する	行為が見えないがその準備段階にある	客体が見当たらないが、確実に暴力が存在する
社会構造にビルトインされた構造的暴力 (社会的不公正)	原爆投下1時間前など潜在的暴力	抑止論

Johan Galtung, "Violence, Peace, and Peace research," Figure 1. 'A Typology of Violence,' *Journal of Peace Research*, VI-3, 1969, pp. 167~191から筆者作成

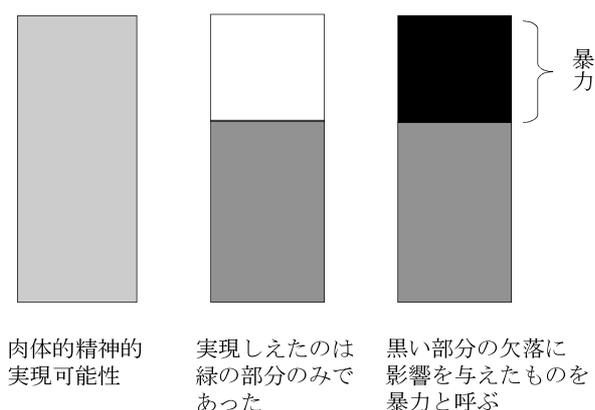


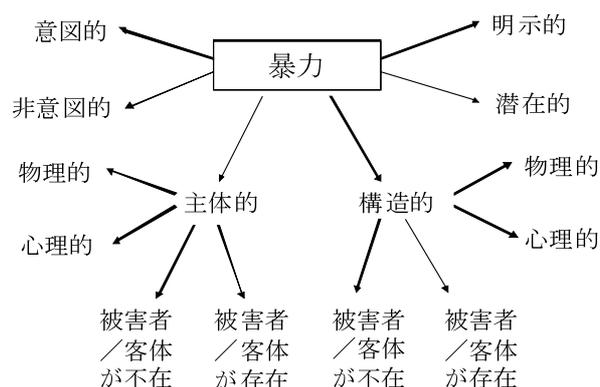
図2 暴力とは (筆者作成)

いるのが暴力だと、ガルトゥングは言いました。

例が挙げられています。先進国では大体平均寿命が80歳です。そこには医療の発達、栄養の供給改善があります。同じ地球上で同時代に生きている人間で、50歳でなくなったとする。何らかの原因で同じような治療が受けられず、栄養供給も不良であった。そこには構造的暴力が働いているとみなさざるをえません。30年分には暴力が働いていたと考えます。しかし、構造的暴力は、このように実証しうる概念ではありません。頭の中を整理して、思考の地平を広げる概念です。それを平和の概念に取り入れていきます。たとえば、射殺や強盗は個人的直接的暴力です。戦争は制度的直接的暴力です。治療可能な病気で亡くなる場合、医療施設の不備、食糧の不均等配分、薬品の不足は構造的暴力です。現代では治療不可能な病気は、主に寿命です。暴力でも何でもありません。

ガルトゥングの暴力のタイポロジーは6次元です(図3)。何か欠落した暴力こそ重要です。主体が欠落している、行為が欠落している、客体が欠落している。それでも暴力があるのです。

このように60年代後半から70年代前半にかけて、先駆者たちが平和学のパラダイムシフトを達成しました(図4)。戦争研究からむしろ貧困や格差、環境、人権の問題が、平和学の主流



Johan Galtung, "Violence, Peace, and Peace research," Figure 1. 'A Typology of Violence,' *Journal of Peace Research*, VI-3, 1969, p. 173.

図3 暴力のタイポロジー

を占めるようになっていきます。そこには、人間の安全保障という考え方も出てきます。

図5は国際連合のホームページの平和の定義です。国連はある時期からWar and peace (戦争と平和)ではなくて、violence and peace (暴力と平和)に改めました。Presence of well-being, すなわち今回の学術大会のテーマを国連は分けています。この中にhealth (健康)はありません。社会正義、ジェンダー、人権は、well-beingで代表させています。構造的暴力を乗り越えて到達する積極的平和という中にwell-beingが含まれると国連は数年前から言ってきました。

伝統的には戦争のない状態としての平和、人権の擁護と充実、調和のとれた発展は、言わば国連の決まり文句でした。それを図7のような形に変えてきました。しかも、最終的に到達するのはpositive peaceとしました。

### WHOの定義

A state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity. WHOの健康の定義です。健康は単なるdiseaseとinfirmityの不在ではない。物理的にも身体的にも精神的にも社会的にも、well-beingが完璧なかたちで満たされている

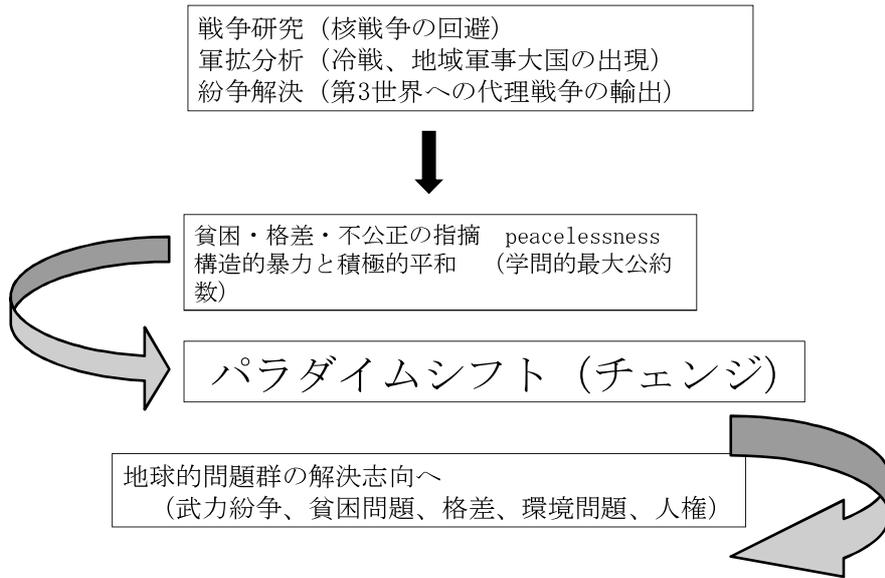
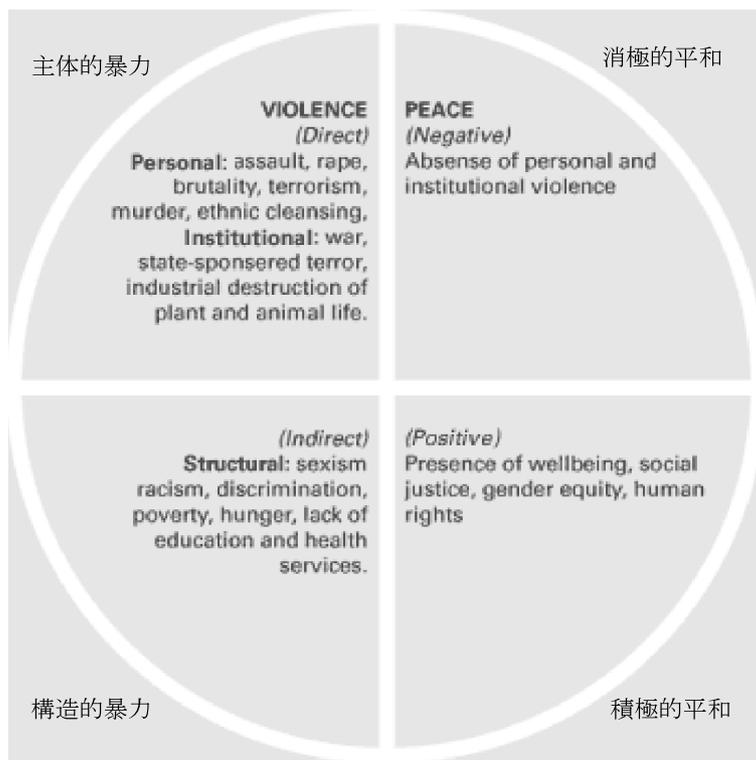


図4 平和学：先駆者たちから学んだその歴史 (筆者作成)



United nation Cyberschoolbus: <http://www.un.org/cyberschoolbus/>

図5 平和の定義

なければ、それは健康ではないということです。1度改正審議のために総会まで回されます。Spiritualとdynamicという言葉が追加されました。dynamicが登場してくると、スパイラルなものを頭の中では描いていることが分かり

ます。残念ながら、総会では議決できずに事務局長継続見直しという結果に終わりました。

こうした一連のことは、MDGの目標がいかに関連しているかを示しています。MDGに含まれる、極度の貧困と飢餓の撲滅、初等教育の

完全普及，ジェンダーの平等，女性のエンパワーメント，乳幼児死亡率の削減，妊産婦の健康改善，HIV・エイズ，マラリアなどの疾病の蔓延防止，持続可能な環境，グローバルな開発パートナーシップの構築，これは全部，平和学の主要なテーマになっています。

### ま と め

Being, having, doingをそれぞれ，存在・所有・行為とすると，well-beingは存在そのものの頭にwellが付いています。そのような包括

概念です。心理学，教育学，社会学，社会福祉論，経済学といろいろな学科を調べました。ある学問はwell-beingを下位概念にして，人権を上位概念にしています。別の学問はwell-beingを上位概念にして，人権をその中に入れていきます。まだ，決定的な結論が見られないのが実情です。平和研究と医学研究の最大の相違は，平和学から生まれる行為規範には制度的な保障がない点です。それをどのように実現していくかが最大の課題になると思います。